

「学習意欲と脱意欲質問紙 (LMNQ)」の 内的構造の分析と尺度化の試み^{1,2}

A Structural Analysis of “Learning Motivation and Negative Learning Motivation Questionnaire (LMNQ)” and a Trial of Standardization

杉 山 憲 司
Kenji SUGIYAMA

I. はじめに

「学習意欲とその阻害条件の研究—個人特性と状況要因の相互作用モデルに基づく脱モチベーションと対処行動の分析—」(杉山, 2002)において、「無気力」、「無関心」、「シラケ」、「指示待ち」など、広い意味でスチューデント・アパシー (student apathy) と称される、いわばネガティブ・モチベーションないし脱モチベーション (a-motivation) ともいうべき現象について分析した。そこでは、さまざまなタイプの脱モチベーションの存在がデータによって検証され、ネガティブな学習動機と気質特性や自尊心の在り方、更には、発達的に「単方向視点」に止まり「相互影響視点」を獲得できないことが脱モチベーションを強めるなど、「人や社会との関わり体験」や「人と環境との関係性視点」などの状況要因との関係が明らかにされた。

上記の研究では、否定的な動機ないし脱意欲のみに焦点を当てた。しかし、今回は「学習意欲」と「脱意欲」の双方に焦点を当てた質問紙を作成し、再度分析し直すことが目的である。その理由は、① 青少年の脱意欲に対する回答姿勢が安定しないのではないかとの疑いを持ったからである。即ち、脱意欲について聞くと脱意欲の態度で答えが返ってくるし、学習意欲について聞くと意欲的態度で答えが返ってくる。② 学習意欲と脱意欲の2要素を一人の人が共に持っており、何らかのきっかけでそのどちらかの姿勢・態度が前面に出ると推測される。従って、③ 尺度化に当たっては

¹ 本研究は平成10年度文部省科学研究費補助金 萌芽的研究 (10871027) による研究の一部である。

² 本研究は平成10年度 東洋大学特別研究「脱モチベーションとその阻害条件の分析—相互作用モデルに基づく調整変数の検討—」による研究の一部である。

一方の態度に偏らせないために、「学習意欲」と「脱意欲」を併せて測定し、その上で両要素を独立に分析することが必要と考えた。即ち、「学習意欲」と「脱意欲」が共に高い人がいると仮定した。このような仮説の下に、④「学習意欲」や「脱意欲」の性質と関係について分析し、それを手がかりに、脱意欲を弱めて、意欲を向上させる対処法に結びつけたいと考えた。

そこで、本研究の目的は、1) 新たに「学習意欲と脱意欲質問紙 (Learning Motivation and Negative Learning Motivation Questionnaire : LMNQ)」を作成し、2) その「学習意欲と脱意欲質問紙」の内的構造の特性を分析し、併せて、3) 基礎統計量 (基準値)、信頼性 (安定性)、併存的妥当性などの尺度特性を明らかにすることである。

II. 「学習意欲と脱意欲」の内的構造の分析

1. 目的

本研究の目的は、1) 新たに「学習意欲と脱意欲質問紙 (Learning Motivation and Negative Learning Motivation Questionnaire : LMNQ)」を作成し、2) その「学習意欲と脱意欲尺度」の内的構造の特性を分析することである。

2. 方法

2-1. 学習意欲と脱意欲質問紙などの調査票の構成

2-1-1) 高校大学生版「人間の意欲と意欲をさまたげる条件」調査票の構成

「人間の意欲と意欲をさまたげる条件」調査票の内、「学習意欲と脱意欲質問紙」は、本研究のために、新たに作成した。質問紙の枠組みは、1) 目標欠如と目標達成、2) 競争回避と積極的挑戦、3) 外的障害の存在とチャンス存在、4) 効力感欠如 (学習性無力感) と自己効力感 (有能感)、5) 否定的感情 (ネガティブ・ムード) と肯定的感情 (明るい気分) の 5 側面の各々に肯定 (意欲) ・否定 (脱意欲) 各々 5 問ずつの合計 50 項目 (質問項目例は因子分析結果などを参照) で構成した。選択肢は、4 (あてはまる)、3 (少しあてはまる)、2 (あまりあてはまらない)、1 (あてはまらない) の 4 段階評定のリッカート尺度である。関連要因としては、個人特性は「ローゼンバーグの自尊感情尺度 (星野命訳日本語版) (遠藤・井上・蘭, 1992) 10 項目。Cloninger の TCI 短縮版 125 項目 (A 版) (または、Costa and McCrae の NEO-PI-R 日本版の短縮版である NEO-FFI 60 項目 (B 版) (TCI 短縮版³、NEO-FFI⁴とも、今回不使用)。状況要因は Hettema and Kenrick (1992) を基に新たに作成した「人と環境との関係性視点」尺度と名づけた人と状況の相互作用に関する認知 7 項目

(但し、今回不使用)。および、尺度特性(妥当性検討)項目としては、大学生の絶望感尺度(Hopelessness Scale 日本語版)(Beck, et al, 1974, 桜井・桜井, 1992) 20項目。以上を合わせるとA版は合計212項目、B版は147項目である。これに、フェース・シート(FS)として学年と性別、および、この調査そのものに対する意見の自由記述で構成した。

2-1-2) 小中学生版「やる気を強めたり弱めたりしてしまう条件」調査票の構成

「やる気を強めたり弱めたりしてしまう条件」調査票の内、「学習意欲と脱意欲質問紙」は、本研究のために、新たに作成した。質問紙の枠組みは、高校大学生版と同様に、1) 目標欠如と目標達成、2) 競争回避と積極的挑戦、3) 外的障害の存在とチャンスの存在、4) 効力感欠如(学習性無力感)と自己効力感(有能感)、5) 否定的感情(ネガティブ・ムード)と肯定的感情(明るい気分)で、5側面の肯定(意欲)と否定(脱意欲)各々5問の合計50項目。これに、個人特性は「ローゼンバーグの自尊感情尺度」10項目。状況要因はHettrema and Kenrick, (1992)を基に作成した小中学生版「人と環境との関係性視点」尺度7項目(今回未使用)。尺度特性(妥当性検討)項目として、子どもの絶望感測定尺度17項目(Kazdin et al, 1983, 桜井, 1989)と、やる気を高める方法についての質問(例えば、「1. ともだちとうまくやれる」、「11. 自分たちの権利や、ちょっとした特別あつかいをゆるしてくれる」など)17項目の合計101項目。これに、自由記述項目として、「5の問い1. 上の文以外に、やる気がでたり、やる気が高まることがあれば、自由に書いて下さい」、「5の問い2. 上の文以外に、やる気がなくなったり、やる気が弱まることがあれば、自由に書いて下さい」、「6. 質問はむずかしかったですか、意見や感想があれば自由に書いて下さい」とフェース・シート(FS)として学年と性別で構成した。

2-2. 被調査者

高校大学生版「人間の意欲と意欲をさまたげる条件」調査の対象者は高校生237人 大学生272人の合計509人。小中学生版「やる気を強めたり弱めたりしてしまう条件」調査の対象者は小学校5年生6クラス180(男95、女85)人。中学校2年生9クラス281(男143、女138)人の合計461名である。但し、確証的因子分析の対象者は、適合度指数を算出するために欠損値のある者を除外したので、高校大学生版は472名、小中学生版は399名である。

3. 結果

3-1. 探索的因子分析による内的構造(下位尺度と尺度項目)の検討

³ 日本語版 TCI (短縮版) の使用を快諾いただいた木島伸彦 (国立精神・神経センター精神保健研究所、現慶應義塾大学商学部) 氏に感謝致します。

⁴ 日本語版 NEO-FFI の使用を快諾いただいた下仲順子 (東京都老人総合研究所心理部門、現文京学院大学) 氏に感謝致します。

3-1-1) 高校大学生版「学習意欲と脱意欲質問紙」の探索的因子分析⁵

探索的因子分析は、学習意欲と脱意欲は並存しうるとの仮説に基づいて、因子数はスクリープロットの変曲点、および結果の解釈し易さなどを基準として3因子から7因子、因子回転法は斜交回転を前提として、主因子法、最尤法などにより探索的に因子分析を行った。また、後述する小中学生用「やる気を強めたり弱めたりしてしまう条件」の学習意欲と脱意欲50項目の仮説再現性などを参考にして、学習意欲25項目と脱意欲25項目を別々に因子分析し、その上で因子得点による二次因子分析を行うこととした。その結果、検証的因子分析にかけることも考慮して、最終的には脱意欲25項目は最尤法・3因子プロマックス回転法、学習意欲25項目は最尤法・4因子プロマックス回転法を選んだ。その上で、純粋で重要な因子による単純構造を求めて、因子負荷量0.3未満の項目、および、2つの因子に0.3以上の因子負荷量を持つ項目を除外し、純粋な因子を抽出した。

脱意欲25項目因子分析結果：

分析結果を表1（脱意欲因子分析 パターン行列）、および、表2（脱意欲因子分析 因子相関行列）

表 1 高校大学生版脱意欲因子分析 パターン行列（最尤法・3因子プロマックス回転）

脱意欲第1因子：効力感欠如（学習性無力感）	因子1	因子2	因子3	共通性
Q2-09 やりたいことがあってもやれる自信がなくて止めたことがある	0.793	-0.066	-0.049	0.528
Q2-29 やりたくても自分には能力がないと思いやらなかったことがある	0.763	-0.060	-0.012	0.514
Q2-19 本当はやりたくても失敗や批判を恐れて自分から行動しなかったことがある	0.586	0.003	0.043	0.374
Q2-49 自分にはやれる力がないと思ひ込みやる気をなくしたことがある	0.528	0.211	0.001	0.478
Q2-03 何かやりたくても知識がなくてできなかったことが多い	0.446	-0.016	-0.053	0.170
Q2-13 手続きや制約条件が多くて出来ることでもやるのをあきらめがちである	0.358	0.070	0.154	0.254
脱意欲第2因子：ネガティブムードによる不行為・行為中断				
Q2-11 ちょっとしたきっかけでも何もしない気がなくなったことがある	-0.098	0.581	0.106	0.319
Q2-35 精神的に傷ついたりショックから友達を信じられなくなったことがある	-0.055	0.552	-0.170	0.230
Q2-25 いじめられたりいじめられるかもしれないと不安になったことがある	0.044	0.499	-0.22	0.234
Q2-15 どちらかというとな不安な気分からうまく進まない場合が多い	0.083	0.361	0.086	0.218
Q2-17 何かを始めようとしてどことなく白けてしまいやらないことがある	0.112	0.334	0.306	0.383
Q2-01 目的を見失って一生懸命やっていたことを中断したことがある	0.080	0.330	0.005	0.153
Q2-21 挫折を味わって途中で行動を放棄したことがある	0.230	0.329	-0.003	0.264
脱意欲第3因子：消極性からくる競争回避・不行為				
Q2-07 やってもやらなくてもいいとしたら特に自分から行動しない	-0.000	-0.147	0.731	0.471
Q2-37 たとえやらなくても叱られたり罰せられないならば進んで行動しない	-0.065	0.130	0.592	0.384
Q2-27 自分に関係ないことには関わらないことにしている	0.002	-0.219	0.491	0.205
Q2-39 いくら勉強しても今更自分にとって望ましい結果になるとは思えない	0.063	0.072	0.306	0.145
因子寄与	3.440	2.890	2.203	8.534
因子寄与率 (%)	20.23	17.00	12.95	50.20

表 2 高校大学生版脱意欲因子分析 因子相関行列

	因子1	因子2	因子3
因子1 効力感欠如	1		
因子2 ネガティブムードによる不行為・行為中断	0.682	1	
因子3 消極性からくる競争回避・不行為	0.487	0.393	1

⁵ 結果の一部は日本教育心理学会第41回総会（1999）において「脱モチベーションと競争回避の研究（その3）—脱意欲に意欲を含めた内的構造の分析—」と題して発表した。

列) に示した。脱意欲第1因子は、「やりたいことがあってもやれる自信がなくて止めたことがある」、「やりたくても自分には能力がないと思いやらなかったことがある」など6項目に因子負荷が高く、効力感の欠如、ないし、いわゆる学習性無力感と考えられ、第1因子は『効力感欠如』と名づけた。脱意欲第2因子は「ちょっとしたきっかけで何もする気がなくなったことがある」、「精神的に傷ついたり、ショックから友達を信じられなくなったことがある」など7項目に因子負荷が高く、何もする気がなくなるとか、信じられなくなったなど不快・不安などのネガティブな情緒体験による行為中断や放棄を内容としていると判断し、第2因子は『ネガティブムードによる不行為・行為中断』と名づけた。脱意欲第3因子は「やってもやらなくてもいいとしたら特に自分から行動しない」、「たとえやらなくても叱られたり罰せられないならば進んで行動しない」など4項目に因子負荷が高く、自分から行動しない、進んで行動しないなどの消極性や、競争や対社会的場面での回避傾向と判断し、第3因子は『消極性からくる競争回避・不行為』と名づけた。なお、表2から、因子間には高い相関があり、特に、第1因子『効力感欠如』と第2因子『ネガティブムードによる不行為・行為中断』の間には0.68というかなりの因子間相関が認められた。

意欲 25 項目因子分析結果：

分析結果を表3(学習意欲因子分析 パターン行列)、および、表4(学習意欲因子分析 因子相

表3 高校大学生版学習意欲因子分析 パターン行列(最尤法・4因子プロマックス回転)

学習意欲第1因子：社会的効力感(自尊心)	因子1	因子2	因子3	因子4	共通性
Q2-14 自分は誰と競争しても勝つ自信がある	0.852	-0.013	0.016	-0.133	0.639
Q2-24 友達と比べてたいていことは自分の方が良くできる	0.774	-0.055	0.005	-0.094	0.511
Q2-20 自分に自信を持っているし友達や先輩からも認められている	0.646	0.006	-0.072	0.234	0.574
Q2-44 自分としては何でもやれば出来るという自信がある	0.540	0.089	0.094	0.049	0.429
学習意欲第2因子：自律的向上心					
Q2-04 二度や三度の失敗してもへこたれたりあきらめたりせずに続けられる	0.007	0.862	-0.044	-0.114	0.663
Q2-42 例え報酬や評価がなくても頑張ってやり続けることが出来る	-0.072	0.435	0.052	0.061	0.202
Q2-06 自分はやりたいことがあるのでその目的達成に向けて努力し続けている	0.089	0.393	-0.033	0.154	0.271
学習意欲第3因子：社会的チャンスが存在					
Q2-48 日本は平和で豊かだからやろうとすれば何でも出来る条件が整っている	-0.057	0.057	0.756	-0.066	0.529
Q2-08 現代は情報化社会なので自分が望む情報は十分に得られる	0.123	-0.080	0.515	-0.070	0.272
Q2-38 現代は自分達にとって障害よりチャンスが多い社会である	-0.022	-0.005	0.453	0.238	0.342
学習意欲第4因子：プラス体験					
Q2-10 生まれてきて良かったと感じている	0.003	-0.078	-0.029	0.678	0.406
Q2-30 私は学校生活が楽しいし気楽に話せる友達がいる	-0.102	0.037	-0.032	0.524	0.239
Q2-34 自分が苦労したり努力したことはそれなりの成果を上げている	0.074	0.155	0.069	0.364	0.282
因子寄与	2.685	1.868	1.616	1.908	8.078
因子寄与率(%)	20.65	14.37	12.43	14.68	62.14

表4 高校大学生版学習意欲因子分析 因子相関行列

	因子1	因子2	因子3	因子4
因子1 社会的効力感	1			
因子2 自律的向上心	0.463	1		
因子3 社会的チャンスが存在	0.351	0.255	1	
因子4 プラス体験	0.457	0.430	0.433	1

関行列) に示した。学習意欲第 1 因子は、「自分は誰と競争しても勝つ自信力がある」、「友達と比べてたいのことは自分の方が良くできる」など 4 項目に因子負荷が高く、競争に勝つ自信や友だちと比較しての有能感、友達や先輩から認められているという自尊心などを内容としていると推察し、第 1 因子は『社会的効力感』と名づけた。学習意欲第 2 因子は「二度や三度の失敗してもへこたれたりあきらめたりせずに続けられる」、「例え報酬や評価がなくても頑張っってやり続けることが出来る」など 3 項目に因子負荷が高く、失敗にへこたれない、報酬や評価がなくても頑張れるなどから、他者との比較に基づく効力感ではなく、相対的に自律的な自己基準に基づく意欲と判断し、第 2 因子は『自律的向上心』と名づけた。学習意欲第 3 因子は「日本は平和で豊かだから、やろうとすれば何でも出来る条件が整っている」、「現代は情報化社会なので、自分が望む情報は十分に得られる」など 3 項目に因子負荷が高く、やろうとすれば何でも出来る条件が整っている、自分が望む情報は十分に得られる、障害よりチャンスが多い社会などの項目内容から、社会的なチャンスがあるという認知を反映していると判断し、第 3 因子は『社会的チャンスの存在』と名づけた。学習意欲第 4 因子は「生まれてきて良かったと感じている」、「私は学校生活が楽しいし気楽に話せる友達がいる」など 3 項目に因子負荷が高く、生まれてきて良かった、学校生活が楽しいなどの項目から、日常生活での肯定的体験の多さと判断し、第 4 因子は『プラス体験』と名づけた。なお、表 4 から、因子間に相関が認められ、第 1 因子『社会的効力感』、第 2 因子『自律的向上心』そして、第 4 因子『プラス体験』の間には 0.43~0.46 のかなりの因子間相関が認められるのに対して、第 2 因子『自律的向上心』と第 3 因子『社会的チャンスの存在』の間は 0.25 とやや相関があるに止まっている。これは第 2 因子が自律的要因であるのに対して、第 3 因子は社会的要因が強く介在する動機づけの特性を反映しているためと推測される。

二次因子分析結果：

以上の結果を受けて、脱意欲 3 因子と学習意欲 4 因子の因子得点による二次因子分析の結果を表 5 (二次因子分析 パターン行列)、および、表 6 (二次因子分析 因子相関行列) に示した。表から、

表 5 高校大学生版「学習意欲と脱意欲質問紙」二次因子分析 パターン行列
(最尤法・プロマックス回転)

二次第 1 因子 (脱意欲)	因子 1	因子 2	共通性
脱意欲第 1 因子 (効力感欠如)	1.021	0.057	0.982
脱意欲第 2 因子 (ネガティブムードによる不行為・行為中断)	0.838	0.036	0.670
脱意欲第 3 因子 (消極性からくる競争回避・不行為)	0.467	-0.260	0.419
二次第 2 因子 (意欲)			
学習意欲第 1 因子 (プラス体験)	0.054	0.874	0.510
学習意欲第 2 因子 (社会的チャンスの存在)	0.101	0.688	0.456
学習意欲第 3 因子 (社会的効力感)	-0.157	0.616	0.408
学習意欲第 4 因子 (自律的向上心)	-0.132	0.594	0.716
因子寄与	2.730	2.747	5.477
因子寄与率 (%)	39.00	39.24	78.24

2 因子が抽出され、二次第 1 因子は『脱意欲 (α 係数=.841)』、二次第 2 因子は『意欲 (α 係数=.801)』と名づけられた。両因子の間にはかなりの負の因子間相関が認められた。この二次因子分析の結果については確証的因子分析の所で、再度、考察する。

表 6 高校大学生版「学習意欲と脱意欲質問紙」
二次因子分析 因子相関行列

	因子 1	因子 2
因子 1 (脱意欲)	1	
因子 2 (学習意欲)	-0.546	1

3-1-2) 小中学生版「学習意欲と脱意欲」調査票の探索的因子分析⁶

脱意欲 25 項目因子分析結果：

分析結果を表 7 (脱意欲因子分析 パターン行列)、および、表 8 (脱意欲因子分析 因子相関行列)

表 7 小中学生版脱意欲因子分析 パターン行列 (最尤法・プロマックス回転)

脱意欲第 1 因子：学習性無力感・競争回避	因子 1	因子 2	因子 3	共通性
Q2-17 良い結果が得られないので止めてしまったことがある	0.810	-0.204	0.003	0.512
Q2-21 めんどくさくなってやらずに止めてしまうことが多い	0.620	-0.123	0.014	0.323
Q2-09 自信がなくてやめたことが多い	0.594	0.091	0.027	0.449
Q2-11 ちょっとしたことがきっかけで何もする気がなくなる	0.588	0.087	-0.043	0.377
Q2-07 やってもやらなくても結果が同じなら自分から進んで行動しない	0.566	-0.194	0.119	0.314
Q2-13 規則やルールが制約となってやるのをあきらめたことがある	0.520	0.057	-0.150	0.219
Q2-01 がんばってきた理由がわからなくなり止めてしまったことがある	0.490	0.179	-0.094	0.305
Q2-37 やっても良いことはないと感じて進んで行動しなくなったことがある	0.490	0.060	0.139	0.395
Q2-15 イライラした不快な気分が原因でうまくいかないことが多い	0.411	0.176	-0.000	0.282
Q2-29 自分には能力がないと思いきらめたことがある	0.327	0.162	0.234	0.386
Q2-49 知らないことわからないことが多くてやる気を無くしたことがある	0.322	0.228	0.141	0.350
Q2-05 一回失敗するとまた失敗しそうで不安になる	0.315	0.200	-0.018	0.201
脱意欲第 2 因子：ネガティブムード				
Q2-35 誤解を受けたショックから友達信じられなくなったことがある	-0.055	0.733	-0.003	0.492
Q2-25 いじめられたりいじめられるかもしれないと恐怖を感じたことがある	-0.096	0.553	-0.008	0.251
Q2-45 人から言われたことが原因で思いっきり不快な気分になることがある	0.046	0.488	-0.059	0.239
Q2-33 時間や施設よりも友達や先生との関係が問題になることが多いと思う	0.008	0.352	0.105	0.174
脱意欲第 3 因子：目標欠如				
Q2-41 やりたいことがわからないので長くは続かない	-0.058	0.034	0.826	0.648
Q2-31 何が得意かわからないので夢中になれることがない	-0.003	-0.114	0.693	0.417
Q2-39 いくら勉強しても今更自分に望ましい結果はえられないと思う	-0.003	0.117	0.452	0.266
因子寄与	4.708	3.125	3.490	11.323
因子寄与率 (%)	24.78	16.44	18.36	59.59

表 8 小中学生版脱意欲因子分析 因子相関行列

	因子 1	因子 2	因子 3
因子 1 学習性無力感・競争回避	1		
因子 2 ネガティブムード	0.571	1	
因子 3 目標欠如	0.659	0.467	1

⁶ 結果の一部は、日本性格心理学会第 8 回大会 (1999) において「脱モチベーションと競争回避の研究 (その 4) —小中学生を対象とした内的構造の分析と尺度特性の検討—」と題して発表した。

列)に示した。脱意欲第 1 因子は、「良い結果が得られないので止めてしまったことがある」、「めんどくさくなってやらずに止めてしまうことが多い」など 12 項目に因子負荷が高く、良い結果が得られない、自信がなくて止めたという効力感の欠如、ないし、いわゆる学習性無力感の要素と、めんどくさくなって、ちょっとしたことがきっかけとなってなど消極性、ないし競争回避とが未分化に混在していると考えて、第 1 因子は『学習性無力感・競争回避』と名づけた。脱意欲第 2 因子は、「誤解を受けたショックから友だちが信じられなくなったことがある」、「いじめられたりいじめられるかもしれないと恐怖を感じたことがある」など 4 項目に因子負荷が高く、否定的体験と否定的感情が共通しているので、第 2 因子は『ネガティブムード』と名づけた。脱意欲第 3 因子は、「やりたいことがわからないので長くは続かない」、「何が得意だかわからないので夢中になれることがない」など 3 項目に因子負荷が高く、やりたいことが解らない、何が得意だかわからないなど目標が未成立、ないし、方向性が混乱した状態と考えて、第 3 因子は『目標欠如』と名づけた。なお、表 8 から、3 つの因子間にはかなりの因子間相関があり、小中学生では、「消極性」と「否定的感情」そして「目標欠如」が相乗的に脱意欲を高めることが推察される。

学習意欲 25 項目因子分析結果：

分析結果を表 9 (意欲因子分析 パターン行列)、および、表 10 (意欲因子分析 因子相関行列)に示した。学習意欲第 1 因子は、「興味を持っていることには夢中になれる」、「目的を達成し、自分が変わったと感じた経験がある」など 9 項目に因子負荷が高く、夢中になれる、自分が変わったと感じた体験、前向きな気持ち、ほめられたことがきっかけで何かを続けているなど、行動的に達成したい課題があるなど、積極性とチャレンジ精神を内容としていると考えて、第 1 因子は『課題達

表 9 小中学生版学習意欲因子分析 パターン行列 (最尤法・プロマックス回転)

学習意欲第 1 因子：課題達成感	因子 1	因子 2	因子 3	共通性
Q2-26 興味を持っていることには夢中になれる	0.569	-0.032	-0.085	0.261
Q2-28 目的を達成し自分が変わったと感じた経験がある	0.544	-0.061	0.121	0.334
Q2-12 今の自分を少し変えてみたい変わらなければという前向きな気持ちがある	0.488	-0.130	-0.178	0.141
Q2-06 本心にやりたいことががんばり続けていることがある	0.457	-0.066	0.194	0.293
Q2-22 ほめられたことがきっかけで好きになりがんばり続けていることがある	0.408	0.096	0.107	0.295
Q2-02 努力した結果が認められることがいちばんうれしい	0.393	0.116	-0.062	0.195
Q2-44 一回や二回の失敗ではあきらめたりしない	0.374	0.114	0.176	0.331
Q2-16 なぜ勉強し学校に行く必要があるのか自分なりに理解している	0.344	0.027	0.134	0.202
Q2-40 ちょっとした親切を受けただけでもすごくいい気分になれる	0.329	0.260	-0.170	0.203
学習意欲第 2 因子：社会的サポート感 (幸福感)				
Q2-30 学校生活は楽しいしなんでも話せる友だちもいる	-0.033	0.759	-0.140	0.450
Q2-18 何かやり出すとみんな支えてくれる	-0.014	0.605	0.080	0.416
Q2-10 この世に生まれてきて良かったと感じている	0.130	0.589	-0.049	0.423
Q2-50 気分がおちこんでもあとまで引きずらず明るい気分であらわれる	-0.188	0.445	0.169	0.208
学習意欲第 3 因子：社会的効力感				
Q2-20 自分に自信を持っているし友達や先生からも認められていると思う	-0.149	0.127	0.757	0.576
Q2-24 友達と比べてたいいのは自分の方が良くできる自信がある	-0.029	-0.150	0.695	0.37
Q2-42 自分のために前向きにやっている	0.233	0.163	0.321	0.371
因子寄与	3.043	2.979	2.536	8.558
因子寄与率 (%)	19.02	18.61	15.85	53.48

成感』と名づけた。学習意欲第2因子は、「学校生活は楽しいし、何でも話せる友だちもいる」、「何かやり出すとみんなで支えてくれる」など4項目に因子負荷が高く、何でも話せる友だちがいる、みんなで支えてくれるなど対人社会性を背景とした社会的にサポートされているとの体験・認知であり、well being と考えられると推察し、第2因子は『社会的サポート感』と名づけた。学習意欲第3因子は、「自分に自信を持っているし、友だちや先生からも認められていると思う」、「友だちと比べて、たいていのことは自分の方が良くできる自信がある」など3項目に因子負荷が高く、友だちや先生から認められているとの自信、友だちと比較しての自信を内容としているので、第3因子は『社会的効力感』と名づけた。なお、表10から、因子間には、かなりの因子間相関が認められ、「課題達成感」、「社会的サポート感」そして「社会的効力感」は相乗的に意欲を強める方向に作用することが推察される。

表 10 小中学生版学習意欲因子分析 因子相関行列

	因子1	因子2	因子3
因子1 課題達成感	1		
因子2 社会的サポート感	0.628	1	
因子3 社会的効力感	0.532	0.564	1

二次因子分析結果：

以上の結果を受けて、脱意欲3因子と学習意欲3因子の因子得点による二次因子分析の結果を表11(二次因子分析 パターン行列)、および、表12(二次因子分析 因子相関行列)に示した。表に示されているように、2因子が抽出され、二次第1因子は『学習意欲(α 係数=.877)』、二次第2因子は『脱意欲(α 係数=.864)』と名づけられた。また、因子間にはかなりの負の因子間相関が認め

表 11 小中学生版「学習意欲と脱意欲質問紙」二次因子分析 パターン行列(最尤法・プロマックス回転)

二次第1因子(学習意欲)	因子1	因子2	共通性
学習意欲第1因子(課題達成感)	0.975	0.122	0.860
学習意欲第2因子(社会的サポート感)	0.836	0.002	0.611
学習意欲第3因子(社会的効力感)	0.690	-0.127	0.684
二次第2因子(脱意欲)			
脱意欲第1因子(学習性無力感・競争回避)	-0.084	0.882	0.847
脱意欲第2因子(目標欠如)	0.192	0.860	0.698
脱意欲第3因子(ネガティブムード)	-0.199	0.709	0.581
因子寄与	2.741	2.621	5.363
因子寄与率(%)	45.69	43.69	89.36

表 12 小中学生版「学習意欲と脱意欲質問紙」二次因子分析 因子相関行列

	因子1	因子2
因子1(学習意欲)	1	
因子2(脱意欲)	-0.499	1

られた。以上の二次的因子分析の結果については確証的因子分析の所で、再度、考察する。

3-2. 確証的因子分析による二次的因子分析結果の検証

3-2-1) 高校大学生版「学習意欲と脱意欲」調査票の確証的因子分析

最終的な内的構造の検討と検査項目の決定のために、試みに、表 5 に示した二次因子分析の 7 因子得点を観測変数として、モデルと実際のデータとの適合度を最尤法による確証的因子分析によって検証した。その結果は図 1 (高校大学生版学習意欲と脱意欲の確証的因子分析) に、パス図と標準化推定値を示した。分析結果について、適合度指標の GFI、AGFI および RMSEA を用いて評価した。GFI 値は 0.946、AGFI 値は 0.885 で、RMSEA 値は 0.144 を示したことから、モデルの適合度は高い(モデルと観測データが異なっていないとは言えない)と考えられる。以上の結果から、学習意欲と脱意欲(LMNQ)尺度は因子の妥当性があるモデルであると言えよう。この結果、高校大学生版の学習意欲と脱意欲質問紙は脱意欲 17 項目 3 因子、学習意欲 13 項目 4 因子からなる「LMNQ 尺度(高校大学生版)」として確定した。以後、この選択された項目に対して「LMNQ 尺度(高校大学生版)」と呼ぶことにする。

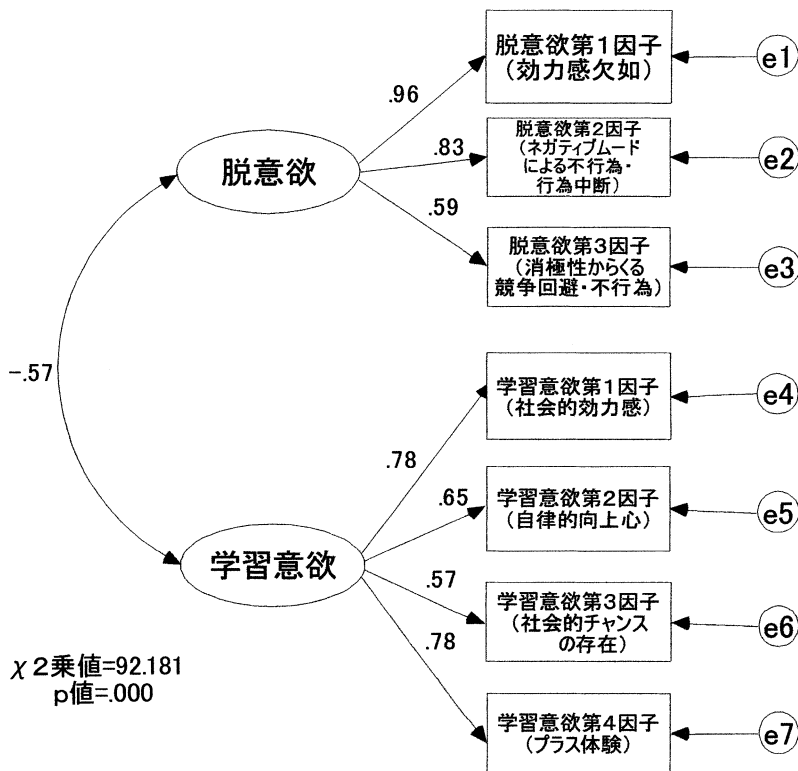


図 1 高校大学生版「学習意欲と脱意欲質問紙 (LMNQ)」確証的因子分析の結果 (パス係数および相関係数)

3-2-2) 小中学生版「学習意欲と脱意欲」調査票の確証的因子分析

同様に、最終的な内的構造の検討と検査項目の決定のために、試みに、表 11 に示した二次因子分析の 6 因子得点を観測変数として確証的因子分析を行った。その分析結果は図 2（小中学生版学習

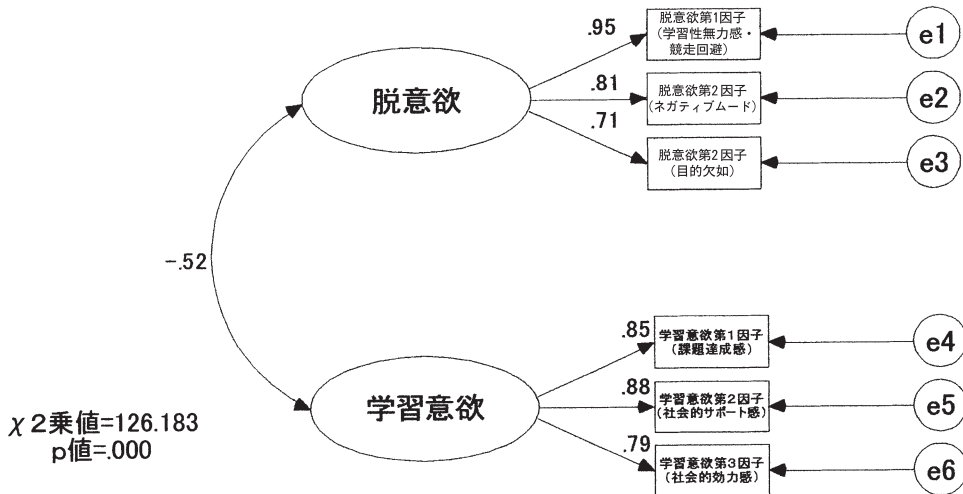


図 2 小中学生版「学習意欲と脱意欲質問紙（LMNQ）」確証的因子分析の結果
(パス係数および相関係数)

意欲と脱意欲の確証的因子分析) に、パス図と標準化推定値を示した。分析結果について、適合度指標の GFI 値は 0.912、AGFI 値は 0.768 で、RMSEA 値は 0.193 を示したことから、モデルの適合度は高校大学生版より低いものの、一応満たされた(モデルと観測データが異なっているとは言えない)と考えた。以上の結果から、これ以外のモデルを排除するものではないが(山本・小野寺, 2002) 学習意欲と脱意欲尺度は因子の妥当性があるモデルであると言えよう。この結果、小中学生版の学習意欲と脱意欲質問紙は脱意欲 19 項目 3 因子、学習意欲 16 項目 3 因子からなる「LMNQ 尺度(小中学生版)」として確定した。以後、この選択された項目に対して「LMNQ 尺度(小中学生版)」と呼ぶことにする。

4. 「意欲と脱意欲質問紙」の内的構造分析結果のまとめと考察

「意欲と脱意欲質問紙」は同一の枠組みに基づいて、新たに、高校大学生版と小中学生版とを作成した。小中学生版は、場面や内容を具体化して、易しい表現を用いた項目を作成したが、結果は同一の因子構造とはならず、発達差を反映する構造の違いが示された。具体的には、脱意欲は①小中学生版は競争回避と学習性無力感が混在して一因子を構成したのに対して、高校大学生版では学習

性無力感と消極性からくる競争回避・不行為はそれぞれ独立して因子を構成した。その結果、②小中学生版と高校大学生版で共通する脱意欲を強める要因は、効力感の欠如(学習性無力感)、消極性(競争回避・不行為)、そしてネガティブ・ムード(否定的感情の蔓延)の3要因が負の相乗作用を持つことが推察される。他方、③外的障害の存在が、小中学生版と高校大学生版の何れにおいても単一の因子を構成しなかったことについては、外的障害をどのように認知するかフィルターによって、即ち、外的統制感や内的統制感などの認知的個人差要因の影響が介在するためと推測した。

学習意欲も同様に、①小中学生版は目標達成と積極的挑戦が結びついて、課題達成感とでも言うべき一因子を構成しているのに対して、高校大学生版では自律的向上心と社会的効力感が分離して、それぞれ独立の因子を構成している。その結果、②小中学生版と高校大学生版で共通する学習意欲の活性化要因は、目標への挑戦(自律的向上心、課題達成感)、社会的効力感と well being(プラス体験、社会的サポート感)であり、二つの要因の相乗効果が学習意欲を高めると推測した。他方、③高校大学生版のみに社会的チャンスが存在が1因子を構成した。これは、発達的に、認知的な視点が確立されると共に、ネガティブな外的障害の存在よりも、ポジティブな社会的チャンスの認知に個人差が現れやすいという、現代の状況を反映していると推測した。この点は、ネガティブな状況の認知にこそ個人差が現れるとの TAT 図版の考え方(安香・藤田、1997)と比較して、現代はポジティブな見方ができるか否かが重要である(ゼリグマン、1990/1991, ピーターソン・マイヤー・セリグマン、1993/2000)とする考えを反映しているように思われるが、今後、更に考察を深める必要がある。

しかしここで捉えた、脱意欲 17 項目 3 因子、学習意欲 13 項目 4 因子からなる「LMNQ 尺度(高校大学生版)」と脱意欲 19 項目 3 因子、学習意欲 16 項目 3 因子からなる「LMNQ 尺度(小中学生版)」は、生物学的遺伝的な外的基準との関連が指定できるような気質要因(山田、2002)などと比べると、それほど通時間的に安定的でも、通状況的に不変的な因子ではなく、時間的空間的な現在とそこに生きる測定対象者に依存的な因子と考えられる。それだけに、現代の学習環境をとりまく状況や個人特性に直接関わる要因としての意味があると同時に、関連する背景要因(遠因)との関連性を検討する必要があると考えている。

III. 「学習意欲と脱意欲質問紙(LMNQ)」の尺度化の試み

1. 目的

本研究の目的 3 の基礎統計量(基準尺度値)、再検査信頼性、併存的妥当性、などの尺度特性を明らかにすることである。

2. 方法

2-1) 基礎統計量、信頼性、妥当性などの尺度特性の検討方法

信頼性の検討は Cronbach の α 係数を用いて内的整合性の検討を行った。また、1 回目の実施後 4 週間以上の間をおいて、同一の対象者に対して LMNQ 尺度を再度実施する再検査法を用いて尺度の安定性 (信頼性) を検討した。併存的妥当性 (構成概念妥当性) は、LMNQ (高校大学生版) 尺度については大学生の絶望感測定尺度 (HS 日本語版)、および、Rosenberg の自尊感情尺度との関連から LMNQ の尺度特性を検討した。LMNQ (小中学生版) 尺度については、子どもの絶望感測定尺度と自尊感情尺度との関連から LMNQ の尺度特性を検討した。

2-2) 被調査者

LMNQ (高校大学生版) の再検査信頼性の対象者は 306 名である。LMNQ (小中学生版) の再検査信頼性の対象者は 96 名である。その他の絶望感尺度や自尊感情の分析対象者は、II. 「学習意欲と脱意欲」の内的構造の分析と同一のデータセットを用いている。従って、高校大学生版「人間の意欲と意欲をさまたげる条件」調査は高校生 237 人 大学生 272 人の合計 509 人。小中学生版「やる気を強めたり弱めたりしてしまう条件」調査は小学校 5 年生 180 (男 95、女 85) 人。中学校 2 年生 281 (男 143、女 138) 人の合計 461 名である。

3. 結果

3-1) 基礎統計量 (基準値)、信頼性などの尺度の安定性

3-1-1) LMNQ 尺度 (高校大学生版) の基礎統計量、信頼性の検討結果

「LMNQ 尺度 (高校大学生版)」の基礎統計量と信頼性係数を表 13 に示した。表から Cronbach の α 係数による内的整合性は脱意欲全体で 0.804、学習意欲全体で 0.773 と高く、各下位尺度についても 0.534~0.790 の値を示した。また、再検査法を用いて時間的安定性をピアソンの積率相関係数を用いて検討した。その結果脱意欲全体で 0.793、学習意欲全体で 0.803 の値を示し、各下位尺度についても 0.468~0.798 の相関係数を示した。何れも統計的に有意な値であり、「LMNQ 尺度」の時間的安定性はほぼ満たされたと言える。従って、内的整合性と再検査の積率相関係数の値から信頼性のある程度備えた尺度といえる。このような「LMNQ 尺度」の測定値の目安となるような基礎統計量を併せて表 13 に示しておいた。

3-1-2) LMNQ 尺度 (小中学生版) の基礎統計量、信頼性の検討結果

「LMNQ 尺度 (小中学生版)」の基礎統計量と信頼性係数を表 14 に示した。表から Cronbach の α 係数の結果は、脱意欲全体で 0.864、学習意欲全体で 0.812 と高く、各下位尺度についても 0.597~0.847 の値を示した。また、再検査法を用いて時間的安定性を検討したピアソンの積率相関係数の結

表 13 LMNQ (高校生版) の基礎統計量と信頼性係数

(全体・有効 N=245)	脱意欲 因子 1	脱意欲 因子 2	脱意欲 因子 3	脱意欲 合計	学習意欲 因子 1	学習意欲 因子 2	学習意欲 因子 3	学習意欲 因子 4	意欲合計
平均値	17.159	19.604	10.208	46.971	9.657	8.746	8.465	9.775	36.644
中央値	17	20	10	47	9	9	8	10	37
標準偏差	3.887	4.249	2.509	8.678	2.694	2.000	2.116	1.955	6.669
歪度	-0.276	0.269	2.026	0.522	0.676	0.665	1.068	0.285	1.476
尖度	0.084	1.717	14.889	4.184	2.787	3.155	4.911	6.111	12.650
α 係数	0.774	0.621	0.602	0.804	0.79	0.582	0.603	0.534	0.773
績率相関係数 (n=234)	.749**	.687**	.692**	.793**	.798**	.655**	.468**	.754**	.803**
(男性・有効 N=99)									
平均値	16.606	19.393	10.363	46.363	9.707	8.838	8.383	9.383	36.313
中央値	17	20	11	47	10	9	8	10	37
標準偏差	3.963	4.278	2.301	8.885	2.544	1.844	1.639	1.877	5.775
歪度	-0.311	-0.140	-0.087	-0.179	-0.054	0.053	0.153	-0.962	-0.089
尖度	0.102	-0.041	-0.055	0.214	-0.253	-0.930	-0.404	1.093	0.199
(女性・有効 N=73)									
平均値	16.849	19.520	9.794	46.164	9.808	8.986	8.739	10.246	37.780
中央値	17	20	10	47	10	9	9	10	38
標準偏差	3.710	3.894	1.899	7.717	2.407	1.751	2.279	1.507	5.419
歪度	-0.412	0.029	0.178	-0.122	-0.025	0.069	0.367	-0.609	-0.476
尖度	-0.525	0.818	0.183	-0.040	-0.035	-0.215	0.832	-0.320	0.573

表 14 LMNQ (小中学生版) の基礎統計量と信頼性係数

(全体・有効 N=92)	脱意欲 因子 1	脱意欲 因子 2	脱意欲 因子 3	脱意欲 合計	学習意欲 因子 1	学習意欲 因子 2	学習意欲 因子 3	意欲合計
平均値	29.456	5.891	10.478	45.826	29.086	12.097	7.706	48.891
中央値	29	6	10	46	30	13	8	50
標準偏差	7.864	2.341	3.225	11.667	4.659	2.801	2.030	8.385
歪度	0.160	0.480	0.090	0.286	-0.880	-0.890	-0.161	-0.766
尖度	-0.097	-0.408	-0.980	0.146	0.795	0.265	-0.026	0.457
α 係数	0.847	0.597	0.695	0.864	0.727	0.664	0.642	0.812
績率相関係数 (n=89)	.741**	.607**	.732**	.777**	.665**	.535**	.677**	.699**
(男性・有効 N=38)								
平均値	28.473	6.026	9.289	43.789	28.394	11.736	7.763	47.894
中央値	29.5	6	9	45	29	12.5	8	49.5
標準偏差	7.852	2.283	2.817	11.706	4.635	2.853	2.005	8.567
歪度	-0.101	0.296	0.498	0.097	-0.403	-0.794	-0.207	-0.568
尖度	0.214	-0.315	-0.230	0.590	-0.719	0.236	-0.154	-0.229
(女性・有効 N=51)								
平均値	29.764	5.745	11.117	46.627	29.647	12.411	7.705	49.764
中央値	29	6	11	46	30	14	8	51
標準偏差	7.895	2.356	3.228	11.485	4.646	2.794	2.032	8.211
歪度	0.455	0.671	-0.184	0.573	-1.323	-1.073	-0.117	-1.008
尖度	-0.218	-0.159	-0.919	-0.001	2.753	0.631	0.329	1.602

** p<0.01

果は、脱意欲全体で 0.777、学習意欲全体で 0.699 の値を示した。各下位尺度についても 0.535～0.741 の相関係数を示し、何れも統計的に有意な値であり、「LMNQ 尺度」の時間的安定性はほぼ満たされたと言える。従って、内的整合性と再検査の績率相関係数の値から、小中学生版についても信頼性のある程度備えた尺度といえる。このような「LMNQ 尺度」の基礎統計量を参考までに、表 14 に示しておいた。

3-2) 尺度特性 (妥当性) の検討

3-2-1) 「LMNQ 尺度 (高校大学生版)」尺度の尺度特性 (妥当性) の検討

新たに作成した「LMNQ (高校大学生版)」が何を測定しているのかを明らかにするために、Hoplessness Scale 日本語版、および、Rosenberg の自尊感情尺度との間の併存的妥当性を検討した結果が表 15 (大学生の絶望感測定尺度・自尊感情尺度と LMNQ (高校大学生版) 尺度の下位尺度との相関分析) に示されている。表から、脱意欲合計で絶望感測定尺度との間に 0.487、自尊感情との間

表 15 大学生の絶望感測定尺度・自尊感情尺度と高校大学生版 LMNQ 下位尺度との相関分析

	脱意欲 因子 1	脱意欲 因子 2	脱意欲 因子 3	脱意欲 合計	学習意欲 因子 1	学習意欲 因子 2	学習意欲 因子 3	学習意欲 因子 4	意欲合計
項目数	6	7	4	17	4	3	3	3	13
人数	468	468	468	462	469	469	469	469	462
絶望感測定尺度 有意性検定	0.461 **	0.401 **	0.471 **	0.487 **	-0.578 **	-0.482 **	-0.421 **	-0.666 **	-0.707 **
人数	493	493	493	486	493	493	493	493	486
自尊感情尺度 有意性検定	-0.536 **	-0.52 **	-0.379	-0.563 **	0.685 **	0.439 **	0.322 **	0.568 **	0.653 **

p<0.01

に-0.563の相関があり、何れも統計的に有意であった。また、学習意欲合計で絶望感測定尺度との間に-0.707、自尊感情との間に0.653の相関があり、何れも統計的に有意であった。各下位尺度についても0.322~0.685の間で理論的に妥当な方向での正、ないし負の相関を示し、何れも有意であった。以上の結果から、LMNQ 尺度 (高校大学生版) の脱意欲は Beck の絶望感尺度 (HS 日本語版) と有意に正の相関を持ち、Rosenberg の自尊感情尺度と有意に負の相関を持つ尺度であることが確認され、また、学習意欲は、逆に、Beck の絶望感尺度 (HS 日本語版) と有意に負の相関を持ち、Rosenberg の自尊感情尺度と有意に正の相関を持つことが確認された。

以上のように、「LMNQ 尺度 (高校大学生版)」は因子の妥当性と内的整合性に加え、標準化された尺度との併存的妥当性ならびに安定性を備えた尺度であることが確かめられた。

3-2-2) 「LMNQ 尺度 (小中学生版)」の尺度特性 (妥当性) の検討

新たに作成した「LMNQ 尺度 (小中学生版)」の尺度特性を明らかにするために、Hoplessness Scale 日本語版、および、Rosenberg の自尊感情尺度との間の併存的妥当性を検討した結果が表 16 (子どもの絶望感測定尺度・自尊感情尺度と LMNQ (小中学生版) 尺度の下位尺度との相関分析) に示されている。表から、脱意欲合計で子どもの絶望感測定尺度との間に0.478、自尊感情との間に-0.631の相関があり、何れも統計的に有意であった。また、学習意欲合計で子どもの絶望感測定尺度との間に-0.698、自尊感情との間に0.579の相関があり、何れも統計的に有意であった。各下位尺度についても0.314~0.691の間で理論的に妥当な方向での正、ないし負の相関を示し、何れも有意であった。以上の結果から、LMNQ 尺度 (小中学生版) についても、脱意欲は Beck の絶望感尺度

表 16 子どもの絶望感尺度・自尊感情尺度と小中学生版 LMNQ 下位尺度との相関分析

(全体・有効 N=92)	脱意欲 因子 1	脱意欲 因子 2	脱意欲 因子 3	脱意欲 合計	学習意欲 因子 1	学習意欲 因子 2	学習意欲 因子 3	意欲合計
項目数	12	4	3	19	9	4	3	16
人数	386	386	386	374	386	386	386	374
子どもの絶望感測定尺度 有意性検定	0.464 **	0.314 **	0.48 **	0.478 **	-0.631 **	-0.653 **	-0.525 **	-0.698 **
人数	430	430	430	413	429	429	429	413
自尊感情尺度 有意性検定	-0.588 **	-0.538 **	-0.53 **	-0.631 **	0.440 **	0.538 **	0.691 **	0.579 **

**p<0.01

(HS 日本語版) と有意に正の相関を持ち、Rosenberg の自尊感情尺度と有意に負の相関を持つ尺度であることが検証された。また、学習意欲は、逆に、Beck の絶望感尺度 (HS 日本語版) と有意な負の相関と、Rosenberg の自尊感情尺度と有意な正の相関を持つ尺度であることが検証された。

以上のように、「LMNQ 尺度 (小中学生版)」も、因子の妥当性と内的整合性に加え、標準化された尺度との併存的妥当性ならびに安定性を備えた尺度であることが確かめられた。

4. 「LMNQ 尺度」の尺度特性のまとめと考察

新たな心理的尺度の作成に際しては、量的尺度については、信頼性、妥当性、測定方法と結果集計の客観性、ものさしとしての原点と基準単位を備えた基準尺度についての標準的資料の提示が求められる。本論文はその方向に向けた第一段階としての尺度特性を示したに過ぎない。しかし、①信頼性については、Cronbach の α 係数は脱意欲全体で高校大学生版は 0.804 (小中学生版は 0.864)、学習意欲全体で高校大学生版は 0.773 (小中学生版は 0.812) と高い内的整合性が示された。また再検査信頼性を示すピアソンの積率相関係数は、脱意欲全体で高校大学生版は 0.793 (小中学生版は 0.777)、学習意欲全体で高校大学生版は 0.803 (小中学生版は 0.699) の時間的安定性を示した。②妥当性については、脱意欲合計で絶望感測定尺度との間に高校大学生版は 0.487 (小中学生版は 0.478)、自尊感情との間に高校大学生版は -0.563 (小中学生版は -0.631) の有意な相関があり、学習意欲合計では絶望感測定尺度との間に高校大学生版は -0.707 (小中学生版は -0.698)、自尊感情との間に高校大学生版は 0.653 (小中学生版は 0.579) の有意な相関が認められ、併存的妥当性が確認された。③客観性については、質問紙尺度であり、手続きと集計法は何れも透明性が高く、十分客観的である。④基準尺度値については、被調査人数が少なく、且つ、被調査対象者についてランダムサンプリング法を用いていないことから、参考に止められた。

IV. 総合的なまとめと考察

これまでの「学習意欲と脱意欲質問紙」の内的構造の分析と、尺度化の試みを踏まえて、LMNQ 尺度の特性として、以下のことが主張できる。

1) 意欲と脱意欲を同時に測定し、それぞれの下位尺度の値から、意欲の状態と脱意欲ないし意欲の阻害状況について明らかにできる。従って、LMNQ 尺度は意欲と脱意欲のスクリーニング用としての使用に加えて、意欲を高め、意欲を阻害する条件についての手がかりを得るのに有効な尺度と考えられる。

2) 学習意欲と脱意欲を小学生から大学生に至るまで、学齢期全体を通して測定することができる。学習意欲と脱意欲の問題への対処は、学齢期全体を通しての課題であり、LMNQ 尺度はそれに応え得る年齢範囲をカバーしている尺度である。

3) 下位尺度得点を利用することによって、ステューデント・アパシーなどの脱意欲の多様な理由を明らかにすることにより、対処法に結びつけることができる。

4) 対処法として、「LMNQ 尺度」の結果を利用して、阻害条件を取り除くだけでなく、学習意欲を積極的に活性化するなど、脱意欲と関わる阻害条件と意欲を活性化する条件を独立してフィードバックできるなど、多面的な対処法の手がかりを得ることが可能である。

他方、残された課題として、

1) LMNQ 尺度で使用していない項目があり、これを除外して測定した場合との比較が残されている。

2) 今回の報告は、質問紙の内的構造と質問項目の決定、それに信頼性と妥当性に関わる尺度特性に限って報告した。しかし、LMNQ 尺度でとらえた特性が、学習意欲と脱意欲の直接要因 (immediate determinants) であるとするならば、遠因 (distal variables) としての個人特性 (例えば、気質や性格との関連性の分析) や、状況・背景要因 (例えば、「人と環境との関係性視点」などの状況の認知特性) とどう関係するか (Adamopoulos and Kashima 1999) 等の分析が残されている。

3) 下位尺度の中に α 係数が相対的に低い尺度があり、尺度項目のさらなる精製が必要かも知れない。

4) 基準尺度値は参考値であり、且つ、高校大学生版と小中学生版としての例示に止めてある。従って、発達の観点に立って、高低学年に分けるなど、より詳細な発達のデータの分析が残されている。

【引用文献】

- Adamopoulos, J. & Kashima, Y. 1999 *Social Psychology and Cultural Context*. SAGE Publications.
安香 宏・藤田宗和 (編) 1997 『臨床事例から学ぶ TAT 解釈の実際』新曜社

- Beck, A.T., Weissman, A., Lester, D. and Trexler, L. 1974 The measurement of pessimism : The hopelessness scale. *Journal of Consulting and Clinical Psychology*, 42, 861-865.
- 遠藤辰雄・井上祥治・蘭 千壽 (編) 1992『セルフ・エスティームの心理学—自己価値の探究—』ナカニシヤ出版
- Hettema, J. & Kenrick, D. T. 1992 Models of person-situation interaction. In Caprara & G. L. Van Heck (Eds.) *Modern personality psychology : Critical reviews and new directions*. Harvester
- Kazdin, A.E., French, N.H., Unis, A.S., Esveldt-Dawsan, K. and Sherick, R.B. 1983 Hopelessness, depression, and suicidal intent among psychiatrically disturbed inpatient children. *Journal of Consulting and Clinical Psychology*, 51, 404-510.
- ピーターソン・マイヤー・セリグマン (著) 津田 彰 (監訳) 1993/2000『学習性無力感—パーソナルコントロールの時代をひらく理論』二弊社
- 桜井茂男、1989 児童の絶望感と原因帰属との関係 心理学研究、60, 304-311.
- 桜井茂男・桜井登世子 1992 大学生における絶望感および抑うつ傾向と原因帰属様式の関係 奈良教育大学教育研究所紀要、28, 103-108.
- セリグマン (著) 斎藤茂太 (監訳) 1990/1991『オブティミストはなぜ成功するか』講談社.
- 杉山憲司 2002 学習意欲とその阻害条件の研究—個人特性と状況要因の相互作用モデルに基づく脱モチベーションと対処行動の分析—東洋大学社会学部紀要 40 卷 1 号 25-49.
- 山田弘司 2002 「Cloninger 気質性格モデルの性格理論の中での位置づけ」行動科学 第 41 卷 第 2 号 39-48.
- 山本嘉一郎・小野寺孝義 (編著) 2002『Amos による共分散構造分析と解析事例 [第 2 版]』ナカニシヤ出版

【Abstract】

A Structural Analysis of “Learning Motivation and Negative Learning Motivation Questionnaire (LMNQ)” and a Trial of Standardization

Kenji SUGIYAMA

The purpose of this study is 1) to make “learning motivation and negative learning motivation questionnaire (LMNQ),” 2) to analyze characteristics of internal structure of the Questionnaire, and, 3) to clarify scale characteristics such as basic statistic value (norm score), reliability (stability), concurrent validity.

The first study was conducted to construct the LMNQ senior high school / university version with high school students (N=237) and university students (N=272). The results of exploratory factor analysis (maximum likelihood method, promax rotation) were as follows: three negative learning motivation factors including “lack of efficacy expectancy,” “negative mood,” and “competition avoidance,” and four learning motivation factors including “feeling of efficacy by social comparison,” “autonomous mastery orientation,” “existence of social chance,” and “happy experience.”

The second study was conducted to construct the LMNQ primary school / junior high school version with primary school children (N=180) and junior high school children (N=281). The results of exploratory factor analysis (maximum likelihood method, promax rotation) were as follows: three negative learning motivation factors including “learned helplessness and competition avoidance,” “negative mood,” and “achievement goal absence,” and three learning motivation factors including “feeling of task achievement,” “feeling of social support,” and “feeling of efficacy by social comparison.”

To inspect a result of second order factor analysis, the confirmatory factor analysis was carried out by observed variables with a factor score. As the goodness of the model was satisfied, the “learning motivation and negative learning motivation questionnaire” were decided as the LMNQ standard. In addition, as a result of having examined internal consistency by an α coefficient of Cronbach, concurrent

validity of coexistence between the Hoplessness Scale Japanese version and the self-esteem standard of Rosenberg, the propriety of the LMNQ standard was confirmed. From the above-mentioned result, the LMNQ standard was considered to be effective to get a clue of screening and coping behavior of learning motivation and negative learning motivation.